

同好会をつくった四人の学生

ほかの運動部と同じく、バドミントン部も、まず同好会として発足した。それは東京オリンピック（昭和39年）を三年後にひかえスポーツ会が期待に胸をふくらませながら、ひたすら鍛錬に明け暮れていた昭和36年の春であった。

二人の学生がいた。一人は新美一雄（昭和38年経）、もう一人は小木曾忠孝（昭和38年商）で、ともに付属高校（当時は京王高校）からきた三年生であった。二人は、日本の大学スポーツ界に主要な位置を占めている本学の課外体育部のなかに、まだバドミントン部がないので、これをつくろうと話合った。新美も小木曾もこのスポーツには未経験だったが、一年下の寺坂国昭（昭和39年法・羽幌高校）と故森田（旧姓佐々木）健吾（昭和39年法・釜石高校）の二人が、高校時代にバドミントン部に在籍していたので発起人に加え、同年4月、新入生を主たる対象として同好会の募集を行ったのである。

当時、本学は一年生が生田校舎に、二年生以上が神田校舎に通学していたが、この募集で男子ばかり20名が入部を申し込んできた。ここに本学のバドミントン部が誕生したわけである。▽部長＝山本久乃武（経済学部教授）▽監督＝同▽主将＝新美一雄▽主務＝小木曾忠孝などで、大学当局への登録をすませるとともに練習を始めた。しかし、会員たちにとって悩みのタネは学内に練習場のないことと、バドミントンが他のスポーツよりも経費のかかることであった。ラケットやネットはともかく、シャトル（はね）が比較的高価で破損しやすいからだ。一日3時間の練習で5ダースのシャトルが消耗するといわれるが、大学当局から支給されるが費用ではとても賄いきれない。練習場には、お茶の水の国民体育館（現存しない）や都内の小・中学校の体育館を夜間、休日に借りて練習を始めたが、なんとしてもシャトルの購入費用を工面しなければならなかった。

そこで会員達は経費調達のためにアルバイトを始めた。ある学生は喫茶店の皿洗いや道路工事に、またある学生は当時のビル建設ブームで需要の多かった会社の引越しなど、いろいろな作業に従事して得た収入を練習費にと投じた。このアルバイトによる部費貢献は今でも続いているが、とにかく発足当時のそんな苦しい状態のなかで、この年の夏休みには磯辺温泉の旅館で初合宿もした。この記念すべき最初の合宿では、宿から3キロほど先の小学校で練習したが、猛暑のなかを往復ランニングであった。こうした学生達は、青春の日々を勉強と勤労とスポーツで繰り返しながら、翌37年には、念願の関東学生バドミントン連盟に加盟を果たし、檜舞台の春季リーグ戦に出場の運びとなるのである

続く

戻る

発足翌年に関東学生連盟加入

本学の関東学生連盟加入時の37年には、参加校が男子33校、女子20校あり、春秋2回のリーグ戦で妙技を競っていた。リーグ戦は強者から順次に男子では1部から5部までであり、1部から4部までが各6校、最下位の5部が9校、女子は同じく1部から部まで、1・2部が各6校、最下位の3部が8校、各部ごとにリーグ戦をおこなって優勝すると、次上部の6位校と入替戦を行い、これに勝てば次上部の6校に昇格、負けた6位校は次下部の1位に降格となる仕組みである。

本学のバドミントン同好会は、発足翌年の昭和37年に、はやくも、この関東学生連盟に加入を許され、同年春のリーグ戦に5部の8位で登録出場した。同好会は、この年も新生に入会を勧誘、かなりの入会者を得たが、その10人に2人は高校時代の経験者で、この経験者たちが主戦力となっている。こうしてバドミントンもほかのスポーツと同じく、小学校位の低年齢から練習を開始して技を磨く時代がきたものとされている。本学バドミントン同好会が、この大学リーグ戦初出場に登録したメンバーは次の通りであった。

- ▽部長＝井下武厚（経済学部教授）▽監督＝山本久乃武（経済学部教授）
- ▽主将＝新美一雄（昭和38年経）▽主務＝小木曾忠孝（昭和38年経）
- ▽会員＝井谷靖（昭和38年経）▽会員＝那須博（昭和38年経）
- ▽会員＝中村省三（昭和38年経）▽会員＝江沢義郎（昭和39年法）
- ▽会員＝森田健吾（旧姓佐々木）（昭和39年法）▽会員＝寺坂国昭（昭和39年法）
- ▽会員＝小川武（昭和40年商）▽会員＝内田繁幸（昭和40年法）
- ▽会員＝野本勝（昭和40年経）▽会員＝入交宏敏（昭和40年法）
- ▽会員＝小林靖雄（昭和40年商）

さて、この記念すべき初出場は国民体育館と東工大・電気大の各体育館で行われ、本学チームは5部の東京教育大・武蔵大・東京電気大・武蔵工大・埼玉大・高崎経済大・山梨大の各大学と対戦し7位となった。5部8校の最下位8位から1位だけあがったが、この年の秋のリーグ戦ではほとんど同様のメンバーが出場して再び8位となり、翌38年春には出場校の増加で6部の2位まで下がった。しかし、ホームグラウンド・専大体育館での秋のリーグ戦には6部で初優勝を遂げ、入替戦に勝って5部に復帰した。このあと選手の新陳代謝をつづけながら43年秋の優勝まで5部のなかで低迷をつづけることになる。

[続く](#)

[戻る](#)

チームの実力高めた高校経験者

対戦成績は不振をつづけたが、昭和40年頃から部員数としてはチームらしくなってきた。40年春の新生をふくめての会員数は20名、うち8名が高校時代にバドミントンを経験していた。特に成瀬誠（昭和44年営、前監督）は山形県の鶴岡南高校時代に東北6県の個人ダブルス3位、山形県のダブルス3位の好記録をもっており、ほかにこの年に主戦力として活躍した選手に竹重三八男（昭和44年営）宍戸功（昭和42年営）高野弘輝（昭和43年営）武田博之（昭和43年営、現会長）倉田収（昭和43年商）らがいる。この頃は生田校舎の体育館で週5日、毎朝2～3時間の練習をつづけたが、リーグ戦での成績は振るわず、40年春には5部の最下位、秋は5部の5位だった。さらに翌41年新生の入会募集では4人の高校時代の経験が加わり、この選手たちの育成をたのしみとしながらも、主力メンバーが、ひきつづきリーグ戦で活躍したが、ようやく春秋とも5部2位とわずかに上昇した程度であった。

ところで翌42年に生田校舎に第一体育館が完成した。この年に主将となった成瀬前監督たちは、この体育館で毎朝、授業の始まる前の7時～9時まで早朝練習を始め、会員のなかには毎朝5時に家をでて、これに加わるという熱心な者をいた。このあたりから全体の練習量がふえると同時に基本的なプレーも始まり、同好会としての練習体系も整ってきた。しかし、残念ながらこの年も春5部4位、秋5部2位とのところであった。

翌43年の新生に、インハイの出場選手だった藤田祐二（昭和47年商）を迎えた。新人に将来を期待しながらも、この年が最後となる成瀬・竹重を中心に、5部優勝を狙ったが、春5部2位にとどまった。秋にはほとんど同じメンバーで挑戦して連戦連勝し、ついに5部で初優勝を遂げた。ひきつづき入替戦では4部6位の国学院大を破って、宿願の4部昇格を遂げた。

[続く](#)

[戻る](#)

有力選手を失って戦力が低下、しかし

勝ちの乗じたチームは、この秋の優勝のレギュラーである佐藤忠志（昭和46年商）、小林敏（昭和46年営）、藤田祐二をふくめた強力メンバーで翌44年春のリーグ戦にのぞみ、一挙に4部2位に上がり、秋にも3位にとどまった。45年には優勝の偉業を残して去った中山弘（昭和41年法）元監督に代わって竹重三八男（副会長）が監督に就任し、新人として後に活躍する立野幸盛（昭和49年営）、佐藤達昭（昭和49年商）が加わった。この年のリーグ戦の成績は春4部2位、秋4部3位であった。

このように昇気流にのったかにみえた勝負運も46年に入って急降下をたどる。46年秋には4部6位となり、入替戦に敗れ5部に降格した。関東学生リーグ戦の加盟校が男子8部で48校、女子は7部で44校となっていた。47年には成瀬前監督が就任し、主将佐藤達昭、主務佐藤力英（昭和49年商）のトリオが牽引力を発揮し、この年の新人に小泉文男（昭和51年営）、渡辺和政（昭和51年商）、尾熊清人（昭和51年法）、肥谷士朗（昭和51年経）を得てチーム強化した。秋には5部3位、秋には優勝。都立大との入替戦で勝ち、4部復帰をはたした。男子の第一次充実期を迎えた。

翌年の48年には、強力な新人小田等（昭和52年法）を迎えた。小田は新潟南高時代に小泉文男のパートナーで1年遅れての入学であったが、その他に故三井幸嗣（昭和52年商）というインターハイダブルス優勝者を加え、レギュラーとして佐藤達昭・佐藤力英・小泉・小田・三竿靖（昭和52年文）肥谷が、秋にはこれに鈴木克卓（昭和52年商）を補強して、バドミントン同好会発足最強のメンバーが出来あがった。この48年春のリーグ戦では一躍、4部2位に進み、秋には優勝して入替戦で成蹊大を下し、3部に昇格した。

さらにこの年、女子が入会した。内藤恵子（昭和52年文）・府川美佐子（昭和52年文）の2人で、この2年後に女子チームが誕生するきっかけとなった。48年に3部入りしたが、49年春には3部2位、秋には優勝して明大を破り2部に入った。これには小泉・三井・鈴木・小田を中心に肥谷・三竿を加えて、一年で3部から2部に昇格した実力は称賛に値する。

[続く](#)

[戻る](#)

女子チーム誕生と部への昇格

翌50年には女子チームの誕生である。女子は48年に入会した府川・内藤につづいて49年には吉田恵美子（昭和53年文）・鈴木直子（昭和53年文）が入った。4人になったので連盟に加盟することになった。当時の女子部門には春のリーグ戦では1部～10部まで各6校、11部8校で合計68校が参加して、本学は11部8校からの出発であった。

この年の男女の成績は春が男子2部4位、女子11部7位、秋には男子2部2位、女子12部2位（女子は12部5校に増加）。女子にとって初の公式戦は春秋とも振るわず、無念の涙をのんだが、この秋から高校経験者の斎木由美（昭和54年商）・片岡恵（昭和55年文）が加わった。同好会はこの年の秋に大学当局に対し部昇格を申請した。51年は男子が春2部3位、秋は2部4位と足踏み状態をつづけるが、女子は春が12部2位に終わったものの、秋のリーグ戦では、鈴木・吉田・斎木・片岡らが活躍、12部で初優勝し、入替戦が不戦勝になり11部に復帰したが、この季から、我が女子選手達に勝利の女神が輝くのであった。昭和52年4月、同好会は晴れてバドミントン部となった。この年のリーグ戦で、男子は春秋とも2部4位にとどまった。鈴木・三井・小田・が卒業した空白があって1部の壁は厚かった。女子は前年の優勝以来、勝ちぐせがついたような連戦戦勝ぶりであった。この年春は11部で優勝し、入替戦で文京女子大を破って10部へ。秋にも優勝し武蔵野音大に勝って9部入り。この年の全試合全勝というパーフェクトゲームの展開でした。

翌53年の関東学生連盟は参加校が増加したため、秋のリーグ戦から順位の編成替えを行った。男子は1・2部が各6校3部をA・B・の2ブロックわけて各6校、4部をA～Dの4ブロックわけて各6校、5部をA～Eの5ブロックにわけA～Dまでを各6校、Eを7校として79校。女子は1・2部を各6校、3部をA・Bにわけて各6校、4部はA～Dの4ブロックにわけて各6校、5部をA～Gの7ブロックにわけてA～Fまで各6校、Gを5校として89校とした。新編成のもとで、男子は選手の補強が不十分ながら、春は2部4位、秋は2部3位に踏みとどまった。一方、女子はさらに躍進をつづけ、女子チーム創立以来の斎木が、在籍最後の年を飾ろうと鈴木恭子（昭和56年文）、安部修子（昭和56年文）、遠藤睦子（昭和57年）、田沢幸子（昭和56年経）、樋山由美子（昭和56年文）とともに頑張っていた。春のリーグ戦は9部で優勝、成城大を破って8部に進出した。秋には順位編成替えによって4部A6位となり、またまた優勝して入替戦で明大（不戦勝）と国士舘大に勝ち3部へ昇格した。前年に続いての完全優勝の快進撃だった。

しばらく停滞していた男子も、54年に選手の補強が軌道にのり牧野裕（昭和55年法）、永瀬勝美（昭和55年文）、森正一（昭和55年商）、島崎哲二（昭和56年営）、武良進吾（昭和56年営）、井坂裕一（昭和56年法）、藤橋和俊（昭和57年営）、玉島元信（昭和57年法）、大山透（昭和57年営）、室田昌毅（昭和57年営）らが活躍、春のリーグ戦で久方ぶりの2部優勝を飾るとともに初めて1部昇格への好機をつかんだが、青学大との入替戦で全く歯がたたず、涙をのんで2部に残留、秋にはさらに2部4位へと後退した。

続く

戻る

連続優勝の女子、念願の1部へ

女子の烈女ぶりはなおつづいて、同年春も3部で優勝、入替戦では日女大と立大をゼロ敗に押さえて2部へ進んだ。さらに秋には2部2位となり、待望の1部進出へあと一歩となった。こうして男女とも、創立以来の念願である1部への進出を夢が現実化してきた。

共に2部への昇格を果たし、今度はどちらが先に1部の壁を破るか、まさに55年度は、この栄光への先駆けを賭けた年であった。この年リーグ戦に出場したメンバーは男子が4年生井坂裕一、島崎哲二、武良進吾、3年生藤橋和俊、大山透、玉島元信、室田昌毅、2年生東野利幸、関口浩、1年生金谷賢一で、女子が4年生鈴木恭子、3年生遠藤睦子、2年生阿久沢智美、高橋裕子、佐野文香の精鋭たちである。まず春のリーグ戦では男子は関東学院大、千葉商大、明大を破ったが、慶大、大東大に敗れて2部3位にとどまった。一方、女子は2部で優勝し、入替戦では慶大を3-0で退け、ついに念願の1部入りを達成した。なお鈴木恭子は、このリーグ戦で1・2部の男女各1名に贈られるガッツ&フェアプレー賞を受賞している。しかし、秋のリーグ戦では、男子は2部4位。女子はさすがに1部の家賃が高かったか6位となり、入替戦でも筑波大に敗れ、残念ながら再び2部に降格してしまった。男子も56年度は善戦をつづけた。春は2部3位、秋は2部2位で、1部にあと一歩というところまで漕ぎつけてきた。

この年、女子は春に再び2部優勝、大妻女子大を破って1部に返り咲いた。秋には1部6位となったが、入替戦で埼玉大に勝って1部に残留とした。57年は、男女とも強豪各大学と最上位を争うこととなった。男子は春秋とも2部2位を守った。女子は春1部5位、秋には1部6位となったが、入替戦で東海大を降し1部残留となった。58年の春を迎え、男女とも十分実力を発揮し健闘し、男子は再び2部で優勝したが、入替戦で早大に惜敗して、念願の1部昇格は、お預けとなった。一方の女子は前年秋に1部6位から1部4位に上がり。上位を目指している。

[続く](#)

[戻る](#)

男子が念願の1部昇格を果たす

まだ2部リーグにいた昭和58年のこと。4月28日から行われた関東大学春季リーグ戦2部は、男子が5勝0敗で優勝したが、入替戦で早大に2-4で敗れ、惜しくも2部残留となった。この頃から、男子は1部昇格できる力を持った選手の層ができつつあった。

一方、春季リーグ戦1部で女子の成績は2勝3敗の4位だった。7月は第26回東日本学生選手権大会が行われ、男子団体は1回戦敗退、男子シングルス、ダブルスも入賞者はいなかった。女子は頑張り準決勝まで進んだが、0-3で日女体大に敗れ、3位決定戦では東女体大に0-3で敗れ、4位となった。女子シングルスでは田向美由紀がベスト8に入り、女子ダブルスでも高橋アキ子・石橋伊都子組が3位、田向・相馬由美子組が4位となった。秋季リーグ戦では、男子が2部2位となった。女子は1部位だった。11月に関東学生新人選手権が行われ、男子団体Aは3回戦で敗退、男子Bも2回戦で敗退した。女子は団体で日女体大に続き準優勝と健闘した。女子シングルスで田向が優勝したのが好材料だった。

昭和59年の春季リーグ戦は、男子は5勝0敗で2部で完全優勝し、塩入誠司がベストプレイヤーに選出された。1・2部入替戦では、前回の入替戦で苦杯をなめた慶大を相手に4-2と快勝し、念願の1部昇格を果たした。また、女子は2勝3敗で1部3位だった。秋季リーグ戦では、さすがに強豪チームの壁は厚かったが、初の1部で男子は1勝4敗で5位と健闘した。女子は3勝2敗で1部3位だった。10月の第35回全日本学生選手権は、男女共に団体にベスト8まで進んだ。

[続く](#)

[戻る](#)

新人の活躍が目立つ

昭和60年の春季リーグ戦も男子は1勝4敗で5位、女子は3勝2敗で3位と、期待されながらも健闘およばなかった。関東学生選手権では、女子シングルスでは大間亜希子と竹中京子がベスト8入りし、ダブルスでは田向・相馬組が3位になった他に、関田律子・西塚ひとみ組がベスト8に入った。この中で、田向と相馬以外は皆1年生である。今後の女子の躍進を感じさせる大会であった。

第28回東日本学生選手権では男子団体は3回戦敗退となったが、女子は団体4位と健闘した他、奥村和恵・青木美幸組が3位に入賞した。秋のリーグ戦では、1部に昇格した男子は、0勝5敗で最下位の6位となり、青学大との入替戦を行い、4-1で勝ち、辛くも1部に残留した。女子は3勝2敗で3位だった。第36回全日本学生選手権では、男女とも団体でベスト8まで進んだ他、男子シングルスで野呂徹がベスト8に入った。11月の関東学生新人戦も男女共に団体3位。男子シングルスでは斉藤隆、ダブルスでは石井祐二・武藤義裕組がベスト8にはいった。女子もシングルスで大間と神埼恵子が、ダブルスでは大間・神埼組と関田・西塚組が3位になった。12月は全日本総合選手権に出場したが、入賞するには至らなかった

昭和61年の春季リーグ戦において、男子は1部リーグで早大に4-1で勝ち、待望の1勝を挙げたが、成績は1勝4敗の5位で終わった。女子は2勝3敗で4位。秋季リーグ戦は男女ともに1勝4敗で5位と振るわなかった。11月の新人戦とはいえ見事女子は優勝を勝ち取り、女子ダブルスでは好調の大間・神埼組が優勝を果たした。しかし、昭和62年の春のリーグ戦は、男子は1勝4敗で5位、女子は3勝2敗で3位だった。関東選手権では、男子ダブルスの武藤・小中英智組が3位に入賞を果たした。秋のリーグ戦は、男女とも1勝4敗で5位。12月の文部大臣杯争奪第36回全日本学生東西対抗に、東軍代表として石井が出場した。

[続く](#)

[戻る](#)

光る女子チームの活躍と・・・

昭和63年の春のリーグ戦では、女子が大健闘し、日体大に続く2位に輝いた。4勝1敗の成績がった。日体大には5-0で完敗したが、今まで勝てなかった青学大との試合で3-2と接戦を勝ち抜いたのが大きかった。

男子は主力選手が卒業して、チームが若返ったことからリーグ最下位の6位となり、東海大との入替戦で苦戦が予想されたが、終わってみれば4-1で勝ち、辛くも1部に留まることができた。第31回東日本学生選手権は、男子がベスト8で、好調の女子は4位になった。秋のリーグ戦では、男子は筑波大を4-1で下し、1勝を上げ5位となった。女子は2勝3敗で同じく5位。12月に行われた全日本東西対抗には、東軍代表として男子の兼坂淳、女子の神崎、関田が出場し、シングルに起用された兼坂は西日本学生3位の深沢と対戦して、その試合ぶりに対して敢闘賞が贈られた。この競技会に専大から選手が3人選抜されたのは、過去最高だった。

平成元年の春季リーグ戦では男子は0勝5敗の6位、女子は1勝4敗で5位となり、男子は昨年同様、東海大と1・2部入替戦で対戦し4-2で敗れ、ついに2部降格となった。秋季リーグ戦は、男子2部で3勝2敗で2位だった。今回は女子が0勝5敗で最下位となり、日女体大に1-3で敗れ、男子同様2部に降格してしまった。

[続く](#)

[戻る](#)

女子チームが1部に復帰する

男女とも1部復帰をかけて平成2年の春季リーグ戦は、男子は2勝3敗で4位に終わったが、さすがに女子は5勝0敗で2部優勝した。鈴木がベストプレイヤー賞、1年の高岩住恵が新人賞を受賞した。1・2部入替戦も、日体大を3-2で下し、1部に復帰した。

第33回東日本学生選手権ではダブルスで、鈴木・高岩組が3位と健闘した。7月には台湾の台北市で、日本・台湾親善試合が行われ、女子で高岩が代表選手に選ばれた。第34回東日本学生選手権女子団体で、4位になりダブルスは鈴木・高岩組が3位に入賞した。秋季リーグ戦では男子は2部3位、女子は1部3位だった。

平成4年の春季リーグ戦では、男子はなかなか2部で優勝することができず、この大会でも3勝2敗で3位だった。しかし男子部員数11人ということを考えると、よく健闘した。女子は1部で1勝4敗4位。続く秋のリーグ戦も男は2部で3勝2敗で3位、女子は1部2勝3敗で5位におわった。なかなかトップに出られない状況が続くが、第43回全日本学生選手権を経ての新人戦ではビックニュースが生まれた。男子は出場しなかったが、女子は団体戦3位になり、女子シングルスで押田が優勝の快挙をなし遂げた。ダブルスでは小吹・大久保組が準優勝した。平成5年の秋で、男子部は部員数が4名となり終了した。女子部の頑張りに期待したい。

[続く](#)

[戻る](#)

最近の活躍ぶり

男子部は部員数の不足から、一時休眠を余儀なくされましたが、平成14年に再度復活して、現在は3部にて奮闘しています。

平成20年5月に第10回世界学生バドミントン選手権大会がポルトガルで行われて、日本代表として井上春奈（平成22年商）がシングルス・ベスト16、ダブルス・16と田村千秋はシングルス・ベスト8、ダブルス16、になった。12月には第57回全日本学生東西対抗戦で、東軍代表として落合智世（平成22年経）がシングルスで勝利し、井上がミックスダブルスで勝利し、東軍8-3西軍で勝ち、井上が最優秀選手賞を受賞した。

平成21年7月にクイーンズサーキット2009千葉大会で、ダブルスで田村・安藤真理絵（平成23年営）組が優勝した。同年の8月では、第52回東日本学生選手権で、シングルスで田村が優勝し、準優勝も井上を獲得した。ダブルスでは井上・穴井友喜（平成23年商）が3位を獲得した。同年10月の第60回全日本学生選手権において、決勝戦を専大2-3法大接戦で敗れ惜しくも準優勝だった。シングルスでは田村が準優勝で、井上がベスト8に入り全日本総合選手権の出場権を獲得した。

平成22年4月のバドミントン協会の推薦により、田村が大阪インターナショナルチャレンジ選手権に出場し、ダブルスで田村・今別府靖代（ヨネックス）組がベスト8に入った。同年9月には第11回世界学生バドミントン選手権大会が台湾台北市立体育館で行われ、田村・佐藤冴香（日体大）組が、ダブルスでベスト16に入った。

学生が [website](#) を作成しています。その中でリーグ戦及び試合結果は、更新されていますので御覧下さい。

[戻る](#)